

(二〇二〇年度)

## 2 国語問題 (六〇分)

(この問題冊子は19ページ、三問である。)

### 受験についての注意

- 一、試験監督者の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
- 二、試験開始前に、試験監督者から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
- 三、試験監督者から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
- 四、筆記具は、HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能を使用してはならない。また、スマートウォッチなどのウェアラブル端末を使用してはならない。
- 五、解答は、解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。
- 六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。また、マーク箇所以外の部分には何も書いてはならない。
- 七、訂正する場合は、消しゴムでいいねいに消すこと。消しきずはきれいに取り除くこと。
- 八、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
- 九、試験監督者の許可なく試験時間中に退場してはならない。
- 十、解答用紙を持ち帰ってはならない。
- 十一、問題冊子は必ず持ち帰ること。

一 次の(A)と(B)の文章は、世界を「知覚世界」と「実在世界」に二分して考える「二元論」について述べたものである。これらの文章を読んで、後の問に答えよ。

(A)

私たちはときに見まちがいをする。場合によっては幻覚を見ることさえある。では、いま見ているこのリングが見まちがいや幻覚の産物ではないと、どうすれば分かるのだろうか。

二元論が考える「知覚像」という言い方をもっとも素朴に考えるならば、それは実物の模写のようなものと考えられるだろう。ここでもまずテレビのアナロジで考えることができる。画面に一人の人物が映っているとしよう。もしその画像が加工されていたり、あるいは受像機の不調で色や形が実物と異なっていたりするのであれば、その分その映像は「正確」ではないとされる。ここで映像の正確さは、元の被写体と映像とを比べてどの程度実物の様子が再現されているかということで評価される。同様に、このアナロジをすなおに適用するならば、知覚像の「正しさ」も、それがどの程度実物のあり方を再現しているかということで評価されることになるだろう。

だが、二元論の考えのもとで、どうすれば知覚像と実物を比べることができるだろう。ここにおいてテレビとのアナロジは崩れる。テレビの場合であれば、画面上に映っている人物に直接会うこともできる。そして「テレビで見るより小柄だ」等の感想をもつたりもするだろう。他方、二元論のもとで知覚像の原因とされた実物は知覚不可能である。知覚されるのはすべて知覚像であり、実物はその原因なのであるから、実物は定義上知覚できないものとされる。ならば、知覚像が実物を忠実に再現しているかどうかを、私たちはどのようにして判断できるのだろうか。不可能である。

知覚された世界に対して、知覚像の原因である実在の世界は意識の外なる世界という意味で「外界」と呼ばれるが、その言葉を使って、これは「外界の懐疑」と呼ばれる。二元論に従うならば、知覚されるのはすべて意識の内にある知覚像でしかない。外界については原理的に認識不可能であり、それゆえ経験している知覚像が正しいものなのかどうかも原理的に知りえないの

である。

二元論をテレビのアナロジで捉えるのが単純すぎると言われるだろうか。実物は知覚できない。それゆえ、実物はそもそも知覚されるような性質をもっていない。二元論者はそう言うかもしれない(そしてまたそう言わざるをえない)。

リンゴの知覚像の原因となるリンゴの実物なるものは、いったい赤いのだろうか? 「赤い」という色は知覚される性質である。そうであるとすれば、なるほど実物のリンゴには赤さの性質を生み出す原因となるようななんらかの特性がありはするだろうが、それはむしろ分子レベルの特性であり、実物が赤いから赤い知覚像が生じるといわけではないと考えられるだろう。あるいは、実物のリンゴは食べれば甘酸っぱい味や香りを生み出す原因となるようななんらかの特性をもっているが、それもまた分子レベルの性質だと考えられる。そのように考えると、実在の世界は色も音も手ざわりも味もない世界ということになる。そして実際、分子や原子といった物理的なものそれ自体は色も音も手ざわりもなく、味もないのである。それゆえ、物理学的な見方も加わって、知覚像と素粒子的世界の二元論が主張される。むしろ現代における二元論はそのような形をとる方がふつうかもしれない。

すると、こうなる。実在の世界には素粒子のみがある。素粒子から成るリンゴから光が反射され、素粒子から成る人間の眼に到達し、素粒子から成る脳を興奮させ、このリンゴの知覚像を生じさせる。では、このような二元論ならば、先に取り上げた二つの困難(時間・空間的な位置の困難と外界の懐疑)は回避できるのだろうか。

いや、そうは行かない。たとえ素粒子を考えたとしても、二つの困難は居座り続ける。テーブルの上にリンゴがある。これはリンゴの知覚像である。ここでさつきと同じ問いが問われる。では、リンゴを構成する素粒子はどこにあるのか。素粒子論のことなどほとんど知らない素人は、見えているリンゴを指差して無邪気に「ここ」と答える。おそらく、物理学者、素粒子論の専門家であっても、その点に関しては素人と同様に「ここ」と答えるに違いない。ここ、まさにリンゴが見えている、知覚されている空間内のこの場所に、リンゴを構成する素粒子はある。だが、二元論者にはこの答えは許されていない。というのも、二元論では、これはリンゴの知覚像であり、素粒子はこの知覚像とは別のものだからである。それゆえ、二元論に従うか

ぎり、素粒子は知覚されているこの空間内にはありえない。この知覚像に対応する素粒子はどこにあるのか、そう問われて知覚の空間内の知覚像のあるそこを指差すのでは、テレビを見ているときに「<sup>5</sup>どの景色？」と問われて画面上を指差すのと、同じことではない。このリングは知覚像である。リングがのっている皿も、皿がのっているテーブルも、この部屋も、すべて知覚像である。この知覚世界全体に対応する素粒子の世界、それはどこにあるのか。二元論をとるかぎり、知覚像と実在世界は空間的な位置関係をもちえず、<sup>6</sup>素粒子がどこにあるのかも言えなくなってしまう。

(B)

外界の懷疑も、先とまったく同じ仕方というわけではないが、同様に生じる。<sup>7</sup>二元論に従えば、知覚像の正しさは実在との対応によって判断される。なるほど、素粒子を考える場合には、知覚像と素粒子的実在との対応は、写真と被写体のような一致・不一致ないし類似性といった単純な対応関係ではない。だが、それがどのような対応関係であれ、素粒子的実在のあり方を適切に捉えた知覚像が、正しい知覚像とされる。そうだとすれば、知覚像の正しさを判定するためには、それが素粒子的実在のあり方を適切に捉えているかどうかを判定せねばならず、そのためには、知覚像の正しさを判定する以前に、それゆえいっさいの観察に頼ることなく、素粒子的実在のあり方を知ることができるのでなければならぬ。

単純化して考えてみよう。リングが見えていても、そのリングを構成する素粒子がそもそもそこに存在しないのであれば、この知覚像は幻覚である。そこで、いま見えているこのリングが幻覚ではないと知るために、私はこのリングを構成する素粒子が存在していることを確かめねばならない。だが、どうやって？どんな物理理論も、観察への信頼の上に作られる。<sup>8</sup>いっさいの観察を信用しないのであれば、物理理論を検証することはもちろん、理論そのものを作ることもできはしない。いったい、観察に頼らずに、どうやってそのリングを構成する素粒子が存在することを知りうるのか。不可能だろう。だとすれば、「知覚像の正しさを判定するためにはまず素粒子的実在のあり方を知らねばならない」とする二元論は、やはり外界の懷疑へと導かれてしまうのである。

素粒子を考えることに問題があるなどと言いたいのではない。問題はあくまでも知覚像と素粒子を二元論的に捉えるところにある。なるほど物理学は、ひとを二元論に誘う強い力をもっている。物理学はあたかも、知覚された世界は主観的であり、物理学が明らかにする世界こそ客観的だと暗に示唆しているようにも思われる。だが、実のところ物理学はけっして二元論的ではない。リングを構成する素粒子はどこにあるのか。この問いに対しては物理学者もまた、知覚された空間内にあるリングを指差して「ここ」と答えるだろう。また、素粒子に関する事象の時間を、物理学者は時計を見ることによって計測する。だが、これまで論じてきたように、こうしたことは二元論には許されていない。二元論を引き受けるならば、実在世界と知覚世界は時間・空間的な位置関係をもちえないはずなのである。物理学者は、いまリングが見えているそこを指差し、「いまここにリングがある。そしてこれは素粒子から成り立っている」と言うだろう。その点において、物理学は二元論ではなく、むしろ素朴実在論的なのである。

(野矢茂樹『心という難問』)

〈注〉○アナロジー：類比

○素粒子：物質や場を構成している最小の基本的な粒子

○時間・空間的な位置の困難：時間・空間的な位置を特定するのが困難であること

問一 二重傍線㊦㊧の「実物」は次のどれにあたるか、それぞれ適切なものを選べ。

- a 知覚されうるかぎりでの実物
- b 知覚不可能なものである実物
- c 知覚が可能か不可能かに限定されない一般的な意味での実物

問二 傍線部1で、テレビとのアナロジーが崩れると言われるのはなぜか、もっとも適切なものを一つ選べ。

- a 二元論では「実物」は意識の外の世界にあるが、テレビの例では元の被写体は画面の外にあるに過ぎないから。
- b 二元論では「実物」は知覚像の原因であるが、テレビの例では元の被写体は知覚像の原因とは言えないから。
- c 二元論では「実物」は知覚不可能となるが、テレビの例では元の被写体も知覚可能な存在でしかないから。
- d 二元論では「実物」は知覚外の実在だが、テレビの例では元の被写体が知覚されて画面上に実在するから。

問三 傍線部2で筆者が、知覚像の正しさは原理的に知りえないと主張しているのはどういうことか、もっとも適切なものを一つ選べ。

- a 意識外の外界の存在が判断できないため、意識の内にある知覚像の存在が確実ではないということ。
- b 実在の世界が知覚できない以上、そもそも知覚像の経験が存在するかどうかはわからないということ。
- c 経験される知覚像が、外界の実物をどれほど忠実に模写しているかの程度がわからないということ。
- d 実在は意識外の外界にあり、知覚像がそれを正しく再現しているかどうかは認識できないということ。

問四 傍線部3で筆者が述べている、「物理的なものそれ自体は色も音も手ざわりもなく、味もおいもない」とは、何を述べているのか、もつとも適切なものを一つ選べ。

- a 分子や原子という物理学の見方では、知覚レベルの性質の原因が取り扱われることはないということ。
- b 分子や原子には、色や音や手ざわり、味やおいなどの性質が事実として存在しないということ。
- c 分子や原子には、色や音や手ざわり、味やおいなどの性質はなく、その原因だけがあるということ。
- d 分子や原子という物理学の見方をする際には、知覚レベルの性質については考慮されないということ。

問五 傍線部4および6で、リングを構成する素粒子はどこにあるのかと問われた場合、二元論者が答えを言えなくなってしまうのはなぜか、適切でないものを一つ選べ。

- a 素粒子の世界全体は知覚世界の全体に対応するわけではないため、知覚されたリングに対応する場所が見当たらないから。
- b 知覚像のリングと素粒子の世界では空間の意味が異なっており、場所を言うための同じような基準が存在しないから。
- c 知覚像のリングには知覚的な場所があるが、知覚不可能な素粒子の世界に知覚世界に準じた場所があるかどうかは分からないから。
- d 「どこにあるのか」とはあくまで知覚像の空間での場所を聞いており、素粒子の空間における場所のことではないから。

問六 傍線部5で、テレビを見ているときに「どの景色？」と問われて画面上を指差す際に、指差されている対象は次のどれか、もつとも適切なものを一つ選べ。

- a テレビの画面には映っていない実在。
- b テレビの画面に映っている画像としての景色。
- c 何かの模様を映しているテレビそのもの。
- d テレビに映っている画像の元になっている景色。

問七 傍線部7にあるように、二元論の立場では、なぜ知覚像の正しさが実在との対応によって判断されるのか、もつとも適切なものを一つ選べ。

- a 二元論では基本的に、知覚像は意識内の世界であり実在は意識外の世界だと考えられているから。
- b 二元論では基本的に、知覚像はその背後にあつて実在する実物の模写だと考えられているから。
- c 二元論では基本的に、知覚像の時間・空間は実在世界の時間・空間がなければ成立しないと考えられているから。
- d 二元論では基本的に、意識外の外界がなければ意識内の知覚像の世界は成立しないと考えられているから。

問八 傍線部8にあるように、観察を信用しないと物理理論そのものが作れない理由は何か、もつとも適切なものを一つ選べ。

- a 知覚像の観察に基づくことで、知覚世界と実在世界の差異が理解されるから。
- b 知覚像の観察に基づくことで、物理的世界の実在という前提の正しさが証明されるから。
- c 知覚像の観察に基づいてはじめてその成立根拠である物理的世界の存在が想定できるから。
- d 知覚像の観察に基づいてはじめてその成立根拠である物理的世界の正しい性質が分かるから。



問九 傍線部9にある、物理学が素朴实在論的であるとはどういうことか、もっとも適切なものを一つ選べ。

- a 物理的世界が同じ性質で知覚的世界として成立していることを素朴に前提している。
- b 知覚的世界とは別のあり方で物理的世界が実在していることを素朴に前提している。
- c 知覚的世界に基づくことで物理的世界が成立していることを素朴に前提している。
- d 物理的世界が知覚的世界と同等の存在として実在することを素朴に前提している。

問十 本文で筆者が主張していることとして、もっとも適切なものを一つ選べ。

- a 二元論の立場をとりながら物理的世界の实在について語ることは困難がある。
- b 物理学的な世界記述を素粒子論に基づいて行うことは、原理的に不可能である。
- c 知覚像と物理的实在との時間・空間的な位置関係は、正確には比較不可能である。
- d 知覚像と実物を区分しつつ対応させる二元論の立場では、外界は実在しえない。

二

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

今は昔、浮世房、篠田の方へ行きたり。いにしへ篠田の杜には名譽の狐ありて、往來の人を化かすといへり。篠田村のなにかしとかやいふ者、住吉に詣でて帰るとて、道のほとりにて美しき女に行き合ひたり。とかくかたらひて夫婦となり、家に帰りて年を経たるに、一人の子を生みけり。その子五歳の時、母にいだかれてありしに、尾の見えければ、これを恥づかしがりて、かの母もとの狐の姿になりつつ、篠田の杜に立ちかくれたり。夫はこの年頃あひ馴れて、それとは知りながら、さすがに名残の惜しく思はれつつ、かくぞ詠みける。

子を思ふ闇の夜ごとにとへかしな 昼は篠田の杜に住むとも  
と詠じてうち泣きけるを、妻の狐は立ち聞きて、かぎりなく悲し、と思ひつつ、窓をへだててかくぞいひける。

契りせし情けの色のわすられで 我はしのだの杜に鳴くなり  
と詠じけり。かくて、夫田をつくれば、かの狐来たりて夜間に早苗を植ゑ、水をせき入れ、草をとりけるほどに、年ごとに満作なりしかば、家大いに富みさかえけるとなり。浮世房この事を思ひ出だし、あはれをもよほしけるが、篠田の村の方へ行くと思へども、在所は手にとるやうに見えながら行き着かず。夜ひと夜歩きて、やうやう明け方になり、それよりすこし心づきて、「これはいかさま狐の化かして、かやうに連れて歩くか」と思ひ、「日ごろ聞きたることあり」と、顔を懐にさし入れて袖口よりのぞきて見れば、背中のはげたる古狐、うしろ足にて立ちて先に行く。「さればこそ」と思ひ、声をあげて、「生き首切られの古狐め」とて追ひかけたれば、田畦ともいはず、狐は逃げてうせぬ。浮世房は、夢のさめたる心地して、「ここはいづくぞ」と人に問へば、「天王寺の前なり」といふ。「口惜しくも化かされけるかな」と思へども甲斐なし。

(浮世物語)

〔注〕篠田…大阪府和泉市葛の葉町に信太森神社がある。

住吉…大阪市住吉区に住吉大社がある。篠田の北に当たる。

満作…豊作

天王寺…大阪市天王寺区に四天王寺がある。住吉の北に当たる。

問一 傍線1「名譽の狐」とあるが、どういう意味か。もつとも適切なものを一つ選べ。

- a 有名な狐
- b 誉れ高い狐
- c 不可思議な狐
- d 悪賢い狐

問二 傍線2「それとは知りながら」とあるが、夫は何を知っていたのか。もつとも適切なものを一つ選べ。

- a 妻が実は狐であったこと。
- b 狐の妻が狐の姿に戻ったこと。
- c 狐の妻が狐の姿に戻って篠田の杜に隠れたこと。
- d 狐の妻が狐の姿に戻って篠田の杜に隠れてもなお、子や夫に未練を持っていること。

問三 「子を思ふ…」の歌は、「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」の古歌を踏まえている。どのような修辭技巧を用いているか、もつとも適切なものを一つ選べ。

- a 「子を思ふ」は「闇」を導く枕詞である。
- b 「子を思ふ闇の」は「夜」を導く序詞である。
- c 「子を思ふ闇」には掛詞で「止み」が掛かる。
- d 「子を思ふ闇」は「杜」の縁語である。

問四 傍線3「あはれをもよほしける」とあるが、浮世房は何に感動したのか。もつとも適切なものを一つ選べ。

- a 狐が美しい女に化けることがあること。
- b 狐も見事な和歌の贈答をすることがあること。
- c 狐も夫婦の情愛が深いことのあること。
- d 狐が人を富裕にすることのあること。

問五 傍線4「在所は手にとるやうに見えながら」とあるが、どのようなことか。もつとも適切なものを一つ選べ。

- a どこまで行っても田舎の風景は変わらなかったこと。
- b 何度も繰り返し返し出発地点の風景が現れてきたこと。
- c 目的地がすぐ目の前に見えていたこと。
- d 自分のいる場所がはっきりとわかっていていたこと。

問六 傍線5「いかさま」とあるが、どのような意味か。もっとも適切なものを一つ選べ。

a 逆に

b 誤って

c 万が一

d 十中八九

問七 傍線6「日ごろ聞きたることあり」とあるが、どんなことを聞いたというのか。もっとも適切なものを一つ選べ。

a 篠田には狐がいるということ。

b 狐が人を化かすということ。

c 狐に化かされて天王寺に行くことがあるということ。

d 狐を見抜く方法があるということ。

問八 傍線7「さればこそ」とあるが、何がわかったというのか。もっとも適切なものを一つ選べ。

a 篠田には狐がいるということ。

b 狐が人を化かすということ。

c 自分が今狐に化かされているということ。

d 人を化かす狐は古狐であるということ。

問九 『浮世物語』は浅井了意の著した仮名草子である。次の中から浅井了意の著作でないものを一つ選べ。

a 醒睡笑せいすいしょう

b 御伽婢子おとぎぼうち

c 東海道名所記

d 江戸名所記

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。(設問の関係で返り点・送り仮名を省いたところがある。)

宋康王舍人韓憑、娶妻何氏。美。康王奪之。憑怨。王囚之、

論<sup>1</sup>為<sup>1</sup>二城旦<sup>1</sup>。妻密遺憑書、繆<sup>2</sup>其辞<sup>2</sup>曰、「其雨淫淫、河大水深、

日出<sup>ハ</sup>当<sup>レ</sup>心<sup>ニ</sup>。」既<sup>ニシテ</sup>而王得<sup>二</sup>其書<sup>一</sup>、以<sup>テ</sup>示<sup>スニ</sup>左右<sup>ニ</sup>、左右莫<sup>ナシ</sup>解<sup>スル</sup>其意<sup>一</sup>。

臣蘇賀对<sup>コタヘテ</sup>曰、「其雨淫淫、言愁且思也。河大水深、不<sup>レ</sup>得<sup>二</sup>往來<sup>一</sup>也。

日出<sup>ハ</sup>当<sup>レ</sup>心<sup>ニ</sup>、心有<sup>ニ</sup>死志<sup>一</sup>也。」俄<sup>ニハカニシテ</sup>而憑乃<sup>チ</sup>自殺<sup>ス</sup>。其妻乃<sup>チ</sup>陰<sup>ニ</sup>腐<sup>ラシ</sup>其衣<sup>一</sup>、

王与<sup>レ</sup>之登<sup>ルニ</sup>台、妻遂自投<sup>ツクニ</sup>台、左右攬<sup>トルモ</sup>之、衣不<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>手而<sup>ス</sup>死。遺<sup>ニ</sup>書<sup>一</sup>於

帶<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>「王利<sup>ニ</sup>其生<sup>一</sup>、妾利<sup>ニ</sup>其死<sup>一</sup>、願<sup>ハクハ</sup>以<sup>テ</sup>屍骨<sup>ニ</sup>賜<sup>リテ</sup>憑合<sup>セラレンコトヲ</sup>葬<sup>一</sup>。」王怒<sup>リテ</sup>、

弗<sup>ズ</sup>聽<sup>キカ</sup>、使<sup>シム</sup>里人<sup>ヲ</sup>埋<sup>メ</sup>之、冢<sup>ツカ</sup>相望<sup>マ</sup>也。王曰、「爾夫婦相愛不<sup>レ</sup>已<sup>ヤマ</sup>、

若能<sup>6</sup>使<sup>レ</sup>冢合<sup>フ</sup>、則吾弗<sup>レ</sup>阻<sup>ス</sup>也。」宿昔<sup>ム</sup>之間、便<sup>チ</sup>有<sup>リテ</sup>大梓木<sup>イナルシボク</sup>、

生<sup>ジ</sup>於<sup>ニ</sup>二冢<sup>ちやうろ</sup>之端<sup>ニ</sup>、旬日<sup>ニシテ</sup>而大盈<sup>キサミツ</sup>抱<sup>ニ</sup>、屈<sup>シテ</sup>体相就<sup>キ</sup>、根交<sup>ハリ</sup>於<sup>ニ</sup>下<sup>ニ</sup>、枝<sup>ハ</sup>錯<sup>まちハル</sup>於<sup>ニ</sup>上<sup>ニ</sup>。又有<sup>リ</sup>二鴛鴦<sup>えんおう</sup>、雌雄<sup>おのおの</sup>各一<sup>ニ</sup>、恒<sup>ニ</sup>棲<sup>すみ</sup>樹<sup>ニ</sup>上<sup>ニ</sup>、晨夕<sup>しんせき</sup>不<sup>レ</sup>去<sup>ラ</sup>、交<sup>ヘテクビラ</sup>頸<sup>ニ</sup>悲鳴<sup>シ</sup>、音声<sup>オン</sup>感<sup>ゼシム</sup>人<sup>ヲ</sup>。宋人哀<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>、遂<sup>ニ</sup>号<sup>シテ</sup>其木<sup>ヲ</sup>曰<sup>フ</sup>「相思樹<sup>ソウシツ</sup>」。「相思<sup>ソウシ</sup>」之名<sup>ニ</sup>、起<sup>レル</sup>于此<sup>ヨリ</sup>也。南人謂<sup>イフ</sup>此禽<sup>とりハ</sup>即韓憑夫婦之精魂<sup>ナリト</sup>。今睢陽<sup>すいよう</sup>有<sup>リ</sup>二韓憑城<sup>ニ</sup>、其歌謠<sup>カガ</sup>至<sup>ルモ</sup>今猶存<sup>ナホ</sup>ス。

(千宝『搜神記』)

〔注〕○宋康王…春秋時代の宋の国王。暴君として知られる。○城旦…城作りの労働を課される囚人。○淫淫…止めどなく降り続く様子。○抱…ひとかかえ。

問一 傍線部1「論」と、同じ意味で「論」が用いられるものを次の中から一つ選べ。

- a 臣請、論其故。
- b 乃論宮中有婦人而嫁之。
- c 以近論遠。
- d 今犯法已論。



問二 傍線部2「其雨淫淫、河大水深、日出当心。」とは、「長雨が続いて、河は川幅も広く水深を増し、日は昇つて胸を照らす」という意味であるが、A「其雨淫淫」、B「日出当心」にはそれぞれどういう意味が隠されているか、次の中からもっとも適切なものを一つずつ選べ。

A「其雨淫淫」

- a 王を恨み続けている。
- b 韓憑を思い続けている。
- c 運命を呪い続けている。
- d 人生を憂い続けている。

B「日出当心」

- a 韓憑が無事帰ることを待っている。
- b 韓憑が潔く死ぬことを願っている。
- c 自分が解放されることを祈っている。
- d 自分が自殺することを決意している。

問三 傍線部3「其妻乃陰腐其衣」とあるが、なぜそのようにしたのか、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 着飾る必要がないため。
- b 自殺の妨害をさせないため。
- c 王への嫌がらせのため。
- d 王を呪詛するため。

問四 傍線部4「王利其生、妾利其死」はどういう意味か、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 王は生前の私の身をお役に立ててくれましたが、死後は私自身が役立てたいと存じます。
- b 王は生きてこそ自分の利益を獲得されるでしょうが、私は死ぬことが自分の利益となるのです。
- c 王は私が生きることこそが望みでしょうに、私は王の死を願っております。
- d 王の望みはご自分が長く生きることでしょうが、私は自分が早く死ぬことを望んでいます。

問五 傍線部5「使里人埋之、冢相望也」はどういう意味か、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 里人たちに遺体を埋めさせて、塚を互いに拝ませた。
- b 里人の遺体を埋めた塚と向き合うように埋葬させた。
- c 埋葬した塚を里人たちが遠くから望めるようにさせた。
- d 里人たちに埋葬を命じ、塚が向き合うように配置させた。

問六 傍線部6「若能使冢合、則吾弗阻也。」の返り点としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 若能使冢合、則吾弗阻也。
- b 若能使冢合、則吾弗阻也。
- c 若能使冢合、則吾弗阻也。
- d 若能使冢合、則吾弗阻也。

問七 傍線部 m n と同じ意味で用いられるものを次の中からそれぞれ一つ選べ。

- |        |      |      |      |      |
|--------|------|------|------|------|
| m 「爾」  | a 爾汝 | b 爾近 | c 爾後 | d 爾余 |
| n 「宿昔」 | a 以前 | b 平生 | c 旦夕 | d 年老 |

問八 本文を踏まえて左の詩が作られているが、この詩では、波線部「鴛鴦」「相思樹」はどういうことの典故として用いられているか。次の中からもつとも適切なものを一つ選べ。

青田松上、一黄鶴 相思樹下、兩鴛鴦 無<sup>キニ</sup>事<sup>シム</sup>交<sup>カハ</sup>渠<sup>カレラシテ</sup>更<sup>モ</sup>相<sup>アハ</sup>失<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>及<sup>バ</sup>従<sup>ツ</sup>来<sup>キ</sup>莫<sup>クニ</sup>作<sup>ル</sup>双<sup>ト</sup>

(北周・庾信「代人傷往」)

- a 故なくして愛する者と別れさせられたことの例。
- b 死後も慕い合う人間の愛情の深さの例。
- c おしどりのように夫婦仲睦まじいことの例。
- d 永遠の愛を讚美する人々が存在することの例。

